

第 7 回
日 本 腰 痛 研 究 会

NMS

MIYAMOTO

1999年11月20日 (土)

名古屋市中小企業振興会館

〒464-0856 名古屋市千種区吹上2-6-3

TEL 052-735-2111 (代)

会長 花井 謙 次

名古屋市立守山市民病院

〒463-0067 名古屋市守山区守山2-18-22

TEL 052-791-2121 FAX 052-793-9112

第7回日本腰痛研究会開催にあたって

会長 花井 謙次

第7回腰痛研究会を開催させていただくことを大変光栄に存じております。腰痛が日常生活に少なからず支障を来すものであることは言うまでもありません。腰痛疾患には多くのものがあり、全人類の80%は生涯のうち一度は腰痛に悩まされるとされ、毎年全人類の2～5%の人が腰痛にかかり病院、その他の治療機関にかかるとされています。さて腰椎椎間板ヘルニアはその本態が1935年にアメリカのミクスチャーとバルによって見いだされたまだ歴史の新しい病気なのですが、この病気は20世紀で最も治療が困難な疾患の一つではとので意見が関係者の間では言われています。それは症状の持続する人が多く社会生活に復帰できなかつたり、労働が不可能であるとする人が多いからです。

私はスウェーデンでの留学時代にナケムソン教授と一緒に腰痛の研究をさせていただき、以来この腰痛疾患の研究治療に携わってきました。当時は（1980年ごろ）日本とヨーロッパ諸国との間にこの腰痛に関する研究や治療方針に大いに差があり、日本では腰痛はひとりでに治る、あまり重篤な病気ではないと思われているようでした。ところがヨーロッパ諸国では腰痛疾患ほど診断が難しく治療に時間がかかるものはないと認識されていました。20年経過した最近では日本でも腰痛に対する考え方や患者さんの受け止め方が、西欧諸国に似かよってきています。それはこの疾患に悩まされている方が激増しているとの印象があり、この病気は治りにくく、いつまでもでも病院やその他の診療機関にかからざるをえないのだと言う患者さんが増えている様に思います。社会全般でこの腰痛疾患に対する考え方が深刻になっており、腰痛に悩まされておられる方々の社会復帰を真剣に考えねばならない時がきているようです。今回はナケムソン教授に『21世紀には我々は腰痛の問題を多いに解決できるであろう』との御講演をお願いすることに致しました。多数の御発表演題とともに今後の腰痛問題解決の礎になるものと期待されます。

1999年11月